



現在、NY に拠点を構え活動する日影眩ステップス初個展である。イラストレーターとしてデビューし、上から下を見る「鳥瞰」ではなく下から上を見上げる「蛙眼」の視線を保ち、「美術」という権威の中枢に殴りこみをかける日影の制作と思想は一貫している。

それでも日影は絶えず探究と変貌を繰り返し、今回、特に目に見える変化を遂げた。それは当初から主題としていた「人間」に、虫に食われたような穴が穿たれる点にある。この図像はこれまで日影の作品を見ていた者も、初めての者にも衝撃を与えた。

日影は今回、大小織り交ぜ 27 点の作品を展示した。振り返ると、穴が穿たれている作品は 8 点のみで、それ以外はこれまで通りに NY の人々を描いている場合が多いことに気が付く。両者を比較すると、背景の処理の違いも発見できる。

私は「web 批評の庭」において、日影が 2011 年に池田 20 世紀美術館で行った個展評を書いた。その際、日影の自らの視線の介在を象徴化する「リアリズム絵画性」について言及した。この見解に今でも変化は無いが、穴が穿たれた作品は、日影の「抽象画」ではないかと想いを巡らす。

リアリズムの行き着く果てが抽象画であるという教科書的見解よりも、アメリカ抽象表現主義とアメリカポップアートは同列だったというこれまでの私見を追従することにはなるのだが、いずれにせよ私は日影の作品を発展史観で捉えようとしているのではないことは分かって欲しい。

日影の穴が穿たれている作品から、F・ベーコンを想起する者もあるだろう。私もその一人に数えられるのであろうが、ベーコンの作品で重要なのは、穴が穿たれているようにも捻じ曲げられているようにも爆発してしまったようにも見える顔よりも、背景が重要なのである。

ベーコンの作品の背景をよく見ると、単一に塗られているのではなく複雑に描かれていることが分かる。レオナルド・ダ・ヴィンチの壁のシミを発見したアンドレ・ブルトンの発想を更に展開したのがベーコンだろう。その為、ベーコンは自己の作品を硝子ケースに入れたがる。

日影の穴が穿たれている作品の背景はベーコンのようには描かれていないが、明らかにこれまでのリアリズム絵画の背景とは異なる意識が渦巻いている。ここにこそ日影の抽象性の秘密が隠されている。この抽象性が次にはどのように変容するのか。(©上段：寺崎誠三、下段：日影眩)

